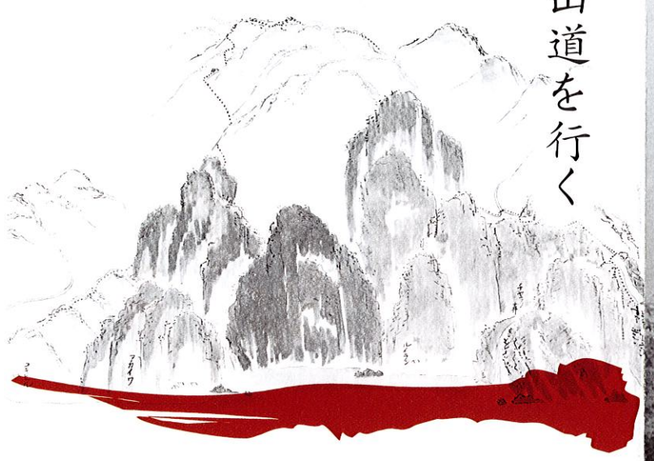
忘れ路の山道を行く



【歴史的な背景について】

西蝦夷地警備のために、幕府は厚田場所請負人濱屋与三右衛門に命じて、山道の開削に当たらせます。同時に、送毛山道、増毛山道（ハママシケ場所請負人伊達林右衛門が開削）も竣工し、遂に道北へ抜ける陸路が完成します。一八五七年（安政四年）、箱館奉行堀利熙一行（三一名）が東西蝦夷地・樺太巡見の際、この山道を通っています。その時、松浦武四郎も天塩まで同行します。

その後、幕府は、一八五九年、天塩～岩内までの警備を庄内藩に命じます。庄内藩は、本陣をハママシケ（現浜益）に、脇本陣をテシホ（天塩）・トママイ（苫前）・ルルモッペ（留萌）に築きます。主な任務は、警備・漁場管理・開墾です。藩士約四四〇名、農民約一三五〇名（浜益村史より）がこの山道を通って、それぞれの地に赴いて行きます。他に、大工・桶屋・炭焼き・味噌醤油の製造者などもいたようです。米・味噌、農具等は船で運んだようです。（現浜益に千両堀り跡有り）

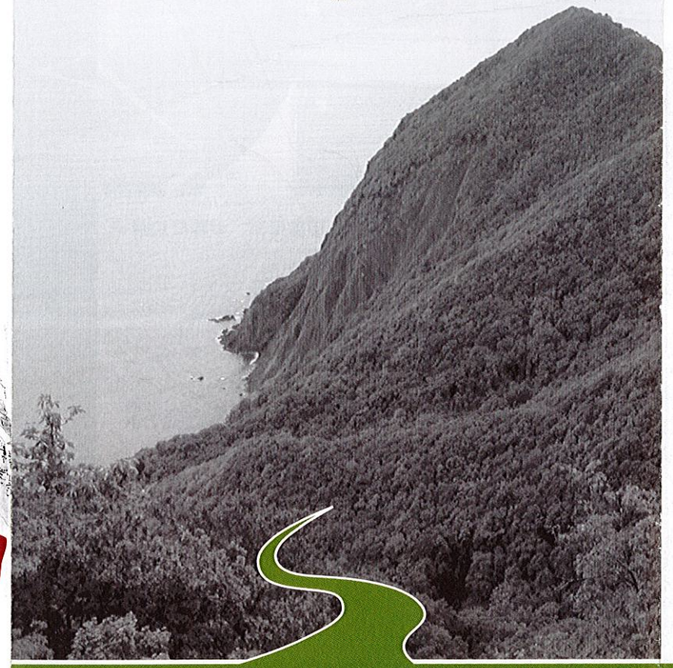
しかし、一八六八年、戊辰戦争が勃発し、庄内藩は引き揚げてしまいます。

その後、明治の中頃に一部改修され、現在の山道になったようです。濱昼山道は、まさに歴史的な山道といえます。

開削当時の山道の様子は「西蝦夷日誌」「丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌」（松浦武四郎著）、「入北記」（玉蟲左太夫著）に記されています。

『ゴキビル』とはアイヌ語で『岬の陰・水渦巻く所』の意味です。

GOKIBIRU SANDO



濱昼山道

【ごきびるさんどう】

濱昼山道保存会

濱昼峠より厚田側を望む

濱昼峠より浜益側を望む

濃昼山道

濃昼山道は、濃昼山道保存会が国有林と協定を結び、幕末から明治期の歴史的な山道を平成の時代によみがえらせるボランティア活動により復元された山道です。

ご利用にあたって

濃昼山道は山岳地を通り、天候の急変もありますので、通行にあたっては、装備等に十分ご注意ください。

こがね山岳会
TEL:0133-79-2213

石狩市・林野庁 北海道森林管理局 石狩森林管理署

幕末に北方警備の要路として使用

濃昼山道 30年ぶりに復活

ササ刈り6年、有志ら整備

「豊かな森魅力 家族で散策を」

現在に蘇（よみがえ）った歴史的山道

【保存活動について】

歴史的な濃昼山道の存在を知り、国道の途中から濃昼峠へ出、厚田側に残雪の濃昼山道を鮮明に見ました。（写真参照）その時の感動が基となり、平成一二年、保存会を立ち上げ、石狩・空知森林管理署、石狩支庁のご理解のもとでボランティアでの保存活動を行ってきました。

沢山の有志によるご協力を頂き、六年目となる平成一七年九月二五日、濃昼～滝の沢トンネル間の開通にようやくこぎつける事ができました。

入口、水準点、休憩所、落石注意などの標識もつけましたが、まだ不十分です。これからも手を加え、更に歩きやすい道にしたいと考えています。森や自然の恵みに触れ、ゆっくりと景色や草花を眺めながら、人・自然・歴史とふれ合う、木漏れ日の散策路にしたいと思っています。